



■今月の表紙

ケンタウルス座A(電波銀河)

撮影/蒔田剛

Planewave CDK20(D508mm f3411mm F6.8) FLI PL16803 Astrodon LRGB Gen2 E Tru-Balanceフィルター Planewave Ascension 200HR

2024年4月12日0時54分(現地時間) 総露光時間1時間48分(L3分×18、RGB各3分×6) ステライメージ9/Pixinsight オーストラリア サイディングスプリングにてリモート撮影

「銀河鉄道の夜」を読んで以来、私にとって特別な撮影領域であるケンタウルス座。そのケンタウルス座に位置する銀河のひとつが、ケンタウルス座Aです。今回は、オーストラリアにあるリモート望遠鏡を使い、ESOの超大型望遠鏡(VLT、口径8.2m)に匹敵する解像度0.6秒角の撮影に挑戦しました。今号から3回にわたり、この「海外レンタル望遠鏡によるリモート撮影」の魅力をご紹介します。

■広告さくいん

ユニカミノルタプラネタリウム/表2
ケンコー・トキナー/4
ケンコー・トキナー サービスショップ/66
アイベル/68
TOMITA/70
シュミット/72
ペンション スター☆パーティ/79
笠井トレーディング/82~87
ウィリアムオブティクス/102
ピクセン/114~表3
五藤光学研究所/表4
AstroArts/8、10、12、16、46、74、76
AstroArtsオンラインショップ/88~91

星ナビ2025年10月号
2025年9月5日発行・発売

- 26 日食カウントダウン 石井 馨
2030年北海道金環日食&2035年能登~関東皆既日食
バーチャルが現実に進出 星見まどか
- 30 天文系VTuber大集合!2025

Deepな天体写真 リモート天文台活用1

リモート天文台という 撮影方法

38

蒔田剛

アンテナ銀河(NGC4038・NGC4039) 撮影/蒔田剛

- 新シリーズ
47 神話から天文学へ アテナイの学堂 早水 勉
第1回 古代ギリシアの天文学者ヒッパルコス 前編

- 54 連載小説「オリオンと猫」 第8回
野尻抱影と大佛次郎物語 転がる紅茶の茶碗 瀬名秀明

- 62 報告「野尻抱影の10cm屈折“ロング・トム”で月を見る観望会」 塚田 健

News Watch

- 5 手のひらサイズのプラネタリウム 全10種のカプセルトイ
- 6 宇宙女子が超小型衛星開発 ドラマ「いつか、無重力の宙で」 梅本真由美



プラネタリウムのカプセルトイ (p.5)



いつか、無重力の宙で (p.6)



宇宙飛行士の日常さん (p.13)



ポケモン天文台 (p.75)

NEWS CLIP 石川勝也	9、11	天文・宇宙イベント情報 パオナビ	78
由女のゆるゆる星空レポ 星の召すま	13	Observer's NAVI	
最新宇宙像 沼澤茂美&脇屋奈々代	14	●変光星 高橋進	80
10月の星空 篠木新吾	17	●新天体・太陽系小天体 吉本勝己	81
10月の月と惑星の動き	20	星ナビひろば	92
10月の天文現象カレンダー	22	●会誌・会報紹介	94
10月の注目 あさだ考房	23	●やみくも天文同好会 藤井龍二	96
新着情報	64	●飲み星食い月す	96
月刊ほんナビ 原 智子	67	ギャラリー応募用紙/投稿案内	97
三鷹の森 渡部潤一	69	バックナンバー・定期購読のご案内/編集後記	98
アクアマリンの誌上演奏会 ミマス	71	オンラインショップ運動 買う買う大作戦	99
ブラック星博士のB級天文学研究室	73	KAGAYA通信	100
天文台マダムがゆく 梅本真由美	75	星ナビギャラリー	103
天文学とプラネタリウム 高梨直紘&平松正顕	77	銀ノ星 四光子の記憶 飯島裕	112

いつも手元に星空を

卓上



ASTROGUIDE 星空こよみ 2026 卓上版

2026年の星空情報をコンパクトにまとめた卓上カレンダー。日々の生活でもっと星空を楽しみたい方から、天文現象に興味がある方まで幅広く活用いただけます。
¥1,200(税込)+送料 大きさ:180×125mm

マンスリーカレンダー

天文現象と月の形がわかるアイコン、上・中・下旬の日出没時刻を記載。予定が書き込める普段使いのカレンダーとしてもおすすめです。



各月の裏面

各月の必ず見ておきたいおすすめの天文現象を解説。「月を楽しむ」コラムも掲載。

どちらを選ぶ!?

卓上

or

壁掛け

アストロアーツの天文カレンダー

星空こよみ 2026
新発売!

卓上・壁掛けセット販売



※アストロガイド星空年鑑2026とのセット販売も予定しています。

美しい星空写真

星ナビギャラリー掲載作から13点をピックアップ。美しい天体・星景写真は自宅のインテリアにも最適です。

見て・使って楽しい!

壁掛け



ASTROGUIDE 星空こよみ 2026 壁掛け版

星空・天体写真と2026年の天文現象が一度に楽しめる壁掛けカレンダー。星ナビギャラリー掲載作からピックアップした天体・星景写真が生活を彩ります。天文現象データも充実し、天体撮影・星空観望会の計画立てにもおすすめです。
¥1,500(税込)+送料 大きさ:420×297mm(A3サイズ・展開時)

マンスリーカレンダー

天文現象と月の形がわかるアイコン、毎日の日の出・日の入り、月の出、月の入り時刻を掲載。

日食カウントダウン

COUNTDOWN

2035年9月2日まで

あと **10** 年

気がつけば能登-関東 皆既日食 まで10年

図9 能登 - 関東皆既日食の皆既食帯

皆既食帯へのアクセスは、新幹線は東北、上越、北陸の3路線が、高速道は常盤、東北、関越、上信越、北陸などの各路線が利用できる。群馬県、栃木県、茨城県、埼玉県、千葉県などでは、2012年の金環食帯と重なる幸運なエリアもある。

図8
2035年9月2日
能登-関東皆既日食の
皆既食帯

この時の金環食帯の幅は250kmとなる。Greatest Eclipse を過ぎた金環食帯はロシアを横断していき、プラーツクを越えバイカル湖を渡り、中国の内モンゴル自治区と黒竜江省を過ぎ、再度ロシアに入ったあと日本海に出る。

日本海を出た金環食帯は、夕方近くになって北海道へ上陸する。このときの金環食帯の幅は約300kmもあり、道南と道北、知床半島などの一部を除き、北海道の大部分が金環食帯に覆われる(図5)。金環食帯の中心線は美唄市のやや北側から帯広市の南側に向けて通っている。札幌市は中心線よりも南側にあり、日本時間16時54分ごろに太陽高度21度で継続時間4分18秒の金環となる(図6)。

どこで観測するかはその日の天候を見ながらという人も多いと思われるが、部分食終了後に水平線に沈んでいく夕陽を見ることができる日本海側が人気を集めそうである。金環食帯は北海道を通過した後、陸地を通ることなく太平洋上で終わりを迎える。

この2030年6月1日の金環日食は2012年5月21日(日本時間)の日本横断金環日食の1サロス(18年11日)後にあたる。2012年の金環日食は早朝の現象で、東京での金環日食時の太陽高度は約35度だった。したがって、太陽と月の視直径差も2030年



に北海道で観測する場合と同じく1.9分角であり、環の太さは2012年の金環日食と同等になりそうだ(図7)。また、2012年の金環日食では、限界線上で観測を行った個人やグループも多かったが、南限界線が陸上を通らなかつたために、北限界線上のみの観測となってしまった。今回は南北の限界線が日本の陸上を通るので、多点観測を行うグループも出てくることだろう。

土曜日の夕方に起こる金環日食なので、道外からも多くの方が日食見物に訪れることになりそうだが気になるのは天気だ。一般的に北海道では梅雨がないといわれている。ただしこのところの気候変動により、この季節に長雨が降り、あるいは前線が停滞するような天候も見られるようになってきた。2030年6月1日は何とか全道で晴れて欲しいものである。

バーチャルが現実(リアル)に進出

天文系VTuber 大集合! 2025

バーチャルな姿で天文・宇宙の魅力を発信するVTuberたち。
最近はその活動もますます広がりを見せています。
2025年の天文系VTuberの“いま”を、
惑星科学者VTuber・星見まどかがお届けします!

●天文系VTuber
猫谷こな
Nekoya
Cocona



●バーチャルサイエンス
コミュニケーター
北白川かかぽ
Kitashirakawa
Kakapo



©VEE

©DigitalBlast

●新人宇宙飛行士VTuber
月女神イチ
Artemis Ichi



●[宇宙のまち能代PR]
VTuber
宙彩しろん
Sorairo Silon

●ロケット工学アイドルVTuber
守推くりあ
Usui Clear

「VTuber」ってなに？

2Dや3Dのバーチャルなアバターを使い、まるでアニメや漫画のキャラクターのような姿で活動する「バーチャルYouTuber（通称VTuber）」。見た目はキャラクターでも、表情や体を動かしながらリアルタイムで視聴者とコミュニケーションを取ることもできる、配信者・タレントです。

2016年末の登場からまだ10年も経っていませんが、若い世代を中心にすっかり身近な存在となったVTuber。その活躍の場は今やYouTubeにとどまらず、テレビやイベントはもちろん、自治体や省庁とのコラボレーションなどさらなる広がりを見せています。

そんなVTuberの活動内容の中心は雑談・ゲーム実況・歌などですが、中には科学や歴史、美術など、特定の学術分野について発信しているVTuberもいます。キャラクターならではの親しみやすさやエンタメ性によって、それまで馴染みがなかった分野にも興味を持つきっかけを届け、難しそうなお世界もぐっと身近に感じさせてくれる存在でもあるのです。

十人十色な天文系VTuberたち

その中でも特に、天文・宇宙分野をテーマに発信する「天文系VTuber」は層が厚く、それぞれが多彩な切り口で、宇宙の様々な魅力を伝えています。

2022年11月号の「天文系VTuber大集合」では筆者を含め5人のVTuberを紹介しましたが、今回は新たに4人に注目。彼女たちの活動紹介に加え、天文系VTuberたちの最近の活躍も併せてご紹介します！

案内◎星見まどか

惑星科学者VTuber。国立天文台 野辺山宇宙電波観測所 特別客員研究員。宇宙に興味がない人にも楽しみながら魅力を知ってもらえるよう、星空案内や宇宙ニュース解説、宇宙×エンタメコンテンツなど、配信を中心に幅広く活動中！



●惑星科学者VTuber

星見まどか

(ほしみまどか)
Hoshimi
Madoka

2021年9月デビュー。惑星科学者VTuber。「宇宙×エンタメ」をテーマに活動している。

YouTube https://www.youtube.com/@Madoka_Hoshimi

X https://x.com/Madoka_Hoshimi
(旧Twitter)



Hoshimi Madoka



専門家コラボ

研究者や専門家をゲストにした「専門家コラボ」や学会コラボでは天文宇宙研究の最前線を知ることができます。



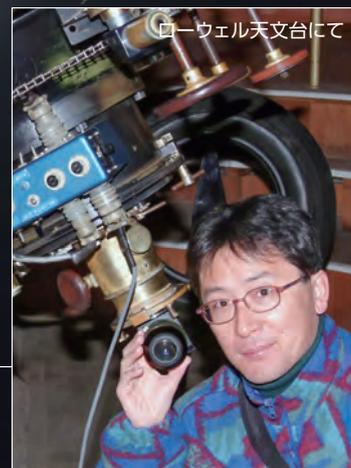
(上・左) 平塚市博物館(神奈川県平塚市)ではコラボプラネタリウム「VTuber 星見まどかと探る太陽系の衛星のヒミツ」が2025年春に投影されました。等身大パネルも展示。

(下) 国立天文台野辺山や野辺山天文台展に参加する施設の一部では、野辺山観測所グッズや星見まどかグッズが販売されています。



リモート天文台 という撮影方法

近年、リモート撮影を行う方が増えるにつれ、「海外レンタル望遠鏡を使ったリモート撮影」という方法を耳にする機会が増えました。実は私も、2023年末から利用してオンライン撮影を楽しんでいます。そこで、今号から3回にわたり、この「海外レンタル望遠鏡によるリモート撮影」についてご紹介します。利用するメリットやその楽しさを深く理解していただくため、今回は私がこのシステムを導入するまでの撮影スタイルの変遷に触れながら、具体的な使用方法や画像処理のノウハウを解説していきます。



解説◎ 蒔田 剛 (まさた たけし)

1959年12月生。1969年のアポロ11号月着陸を契機に天文学への関心を深める。趣味のカメラが縁となり、キヤノン株式会社に入社。同社にてカメラおよびプリンターの画像技術開発に従事し、天文用デジタル一眼レフカメラEOS 20Da、60Da、EOS Raの開発を担当した。現在、合同会社 Produce any Colour TalZ 代表。 <https://taiz.jp> →



リモート天文台で撮影したNGC253

この銀河は、世界の超大型望遠鏡でも頻繁に撮影されるため、写真比較の好対象となる天体だ。リモート望遠鏡を用いて、スターバースト銀河の激しい活動と、点在する超遠方銀河の静謐な姿を対比させて表現してみた。
Planewave CDK 20 (補正レンズ付ドール・カーカム反射 D 508mm f3411mm F6.8)
FLI PL 16803 冷却 CCD カメラ Astrodon Gen2 E series LRGB フィルター
L: 3分×49コマ RGB: 各3分 (12/6/9コマ) 2×2 ピニング
Ascension 200HR 赤道儀ノータッチガイド
オーストラリア サイディングスプリングにて

天体写真の楽しみ

リモート撮影をご紹介する前に、まずは天体写真の楽しみ方を大まかに整理してみましょう。主に次の3つのカテゴリーに分類できるかと思います。

1. より良い画像を得る
2. 自分で撮った実感
3. 道具に凝る

私が利用しているリモート撮影では、自分の機材のように道具に凝るのは難しいですし、ライブ撮影に比べると「自分で撮った実感」が薄れるのは事実です。しかし、海外のリモート施設はチリ、オーストラリア、アメリカ西海岸など世界有数の観測地に設けられており、これらの地域は、天体撮影にとって高い晴天率と素晴らしいシーイングかつ透明度という好条件に恵まれているのです。つまり、「より良い画像を得る」ことを重視するなら、非常に優れた、そして恵まれた撮影方法のひとつと言えるでしょう。

私はこれまで、移動撮影に始まり、自宅観測所、さらには海外観測所での撮影を経験してきました。その中で最終的に、海外レンタル望遠鏡によるリモート撮影によって、安定して「より良い画像を得る」という天体写真の楽しみを手に入れたと実感しています。今回は、このリモート撮影をご紹介するにあたり、私の撮影スタイルの変遷を振り返りながら、その利用メリットについて詳しく解説していきます。

天文ファンを魅了した 不朽のバイブル 「パロマ天体写真集」

私が生まれた1959年は、1969年のアポロ11号月面着陸をリアルタイムで目撃した、熱心な天文ファンが多い世代だと感じています。私たちを含め、当時の天文ファンに大きな感動と影響を与えたのが、1974年に発行された写真集「パロマ天体写真集 / 巨人望遠鏡がとらえた宇宙の姿 (1977年 地人書館刊)」でした (写真1)。もちろん、現在ではハッブル宇宙望遠鏡やジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡の画像が私たちにパラダイムシフトをもたらしてくれています。しかし、天体写真の原点にしてバイブルと言えます、間違いなくこの1冊でしょう。

ここに集められた天体写真は、1958年

写真1 「パロマ天体写真集」地人書館刊



写真2 200インチのヘール望遠鏡でフィルム装填する写真技師ウィリアム・C・ミラー(画像:パロマー観測所)

写真3 NGC 3190 (しし座) などの星雲の群「パロマ天体写真集 (地人書館)」から



写真5 自宅で撮影した
NGC 3190 (しし座) などの星雲の群

2005年12月10日 露出180分
FRC300 (D300mm f2348mm F7.8)
昭和機械製作所 25E SBIG STL-11000M
L:10分×15コマ RGB:各10分 (1/1/1コマ)
2×2ピニング



から1965年の間に、パロマー天文台の写真技師ウィリアム・C・ミラーによって撮影されましたが (写真2)、当時としてはたいへんな技術課題を克服した上で撮影に至っています。文献 (参考資料1) によれば、長時間露光時に発生するフィルム感度の低下 (低照度相反則不軌) は、3つの乳剤層 (赤、緑、青) に対して異なる影響を及ぼすため、露出時間によるカラーバランスの変動という根本的な欠点が生じます。そのために3年強をかけ200インチのヘール望遠鏡と新しいフィルムを最適に組み合わせる技術を開発し、3色の感光層の感度差を補正するカラーフィルターを用いる撮

影手法を確立しました。

この歴史的な写真集に収録された馬頭星雲をはじめとする数々の美しい写真は、私をはじめ当時の天文少年たちの心を釘付けにしました。中でも私が特に衝撃を受けたのが、「NGC 3190 (しし座) などの星雲の群」でした (写真3)。この1枚で、まさに「宇宙の深遠さ」を体感して以来、私もいつか、しし座の領域に望遠鏡を向け、あの壮大な景色を自らの手で捉えたいと夢見るようになりました。

このように、私たちの世代に夢を与えてくれた写真技師ウィリアム・C・ミラー氏に、改めて感謝と敬意を表します。

ミュトス アストロノミア
神話から天文学へ

アテナイの学堂

第 1 回

古代ギリシアの天文学者ヒッパルコス 前編 妥協を許さない批判と実証の天才

古代ギリシアは、神々が大空を駆け巡っていた一方で、文化の一大分野である自然哲学が開花した時代でもありました。賢人たちは秩序と法則を求めて天体の動きを観測し、記録と計算にもとづく天文学のいしずえを築き上げていったのです。

連載「エーゲ海の風」で星座神話を文化と天文学の視点で掘り下げた早水 勉さんが、古代ギリシアを中心に天文学の黎明をたずねて新たな旅へ出発。初回は、徹底した実証主義で後世の天文学の発展を決定づけた古代ギリシア最高の天文学者ヒッパルコスに焦点を当てます。

ナビゲーター 早水 勉 (はやみず つとむ)

佐賀市星空学習館

星食観測・研究をライフワークとして活動し、日本天文学会天文功労賞、国際表彰「ホーマー・ダボール賞」を受賞。古代ギリシアを中心とする天文学史にも造詣が深く、連載「エーゲ海の風」をまとめたムック「星のギリシア神話研究 星座を彩る物語と文化」を2024年12月に出版。ウェブサイト「HAL星研」

<http://hal-astro-lab.com/history.html>

ラファエロ画「アテナイの学堂」(1509~1510年、バチカン宮殿)。古代ギリシアの著名な哲学者たちを描いたフレスコ画。建物の中央を歩く二人は、プラトン(左)とアリストテレス(右)。右端の背中を向け地球儀を持つ人物はプロトレマイオスとされる。

不定期に掲載しておりました「エーゲ海の風」は、おかげさまでひとまずの区切りとなりました。今回から古代の科学・天文学にフォーカスした「アテナイの学堂」に衣替えして新シリーズが始まります。この分野を調査していくと、現代でも研究中で評価が変遷しているものや、日本国内では、これまであまり知られていないトピックがとて多いことがわかります。このような古くて新しい内容を、天文愛好家向けにわかりやすく解説する試みです。

ヒッパルコスとは

初回に登場するのは「ヒッパルコス (Hipparchus BC190年ごろ～BC120年ごろ)」です。天文愛好家なら一度は耳にするこの巨人に対する評価は「古代ギリシア最高の天文学者」です。グリフィス天文台 (米国カリフォルニア) のモニュメントでは、歴史上最も偉大な天文学者たちの一人に名を連ねています。

しかしながら、ヒッパルコスの生涯も業績も不明なことが多く、日本国内の資料に至っては非常に貧弱と言わざるを得ません。比較的近年まで、古代ギリシア最高の天文学者といえばプトレマイオス (Claudius Ptolemaeus AD83～168頃※1) を指していました。ところが、プトレマイオス自身の知見の多くがヒッパルコスを出典としており、また、他の古代の哲学者※2たちの文献にあ

ロサンゼルス近郊にあるグリフィス天文台のモニュメントには、史上最高の天文学者6名が彫刻されている。右はそのうちの一人として巻物を持った姿で立つヒッパルスコス。

ローマ帝国時代に製造されたニカイアの硬貨。ヒッパルコス (右) が刻まれている。AD253～260年、青銅製。(アメリカ貨幣協会 所蔵)



(下) 現在のニカイア (トルコ・イズニック)。ヒッパルコスの生誕地だが、その痕跡はまったく見つけられない。2回のキリスト教会議 (ニカイア公会議 325年、787年) でも知られる街だ。



古代ギリシアの自然哲学者・詩人 年表	BC5世紀	BC4世紀	BC3世紀	BC2世紀	BC1世紀	1世紀	2世紀
	クラシック期		ヘレニズム期			帝政ローマ	
	BC400	BC300	BC200	BC100	西暦紀元	AD100	AD200
メトン (Meton BC5世紀)	メトン周期の発見						
エウドクソス (Eudoxus BC408～BC355ごろ)		「ファイノメナ」					
アリストテレス (Aristoteles BC384～BC322)		万学の祖					
チモカリス (Timocharis BC320～BC260ごろ)			星表の作成				
アラトス (Aratus BC315～BC240ごろ?)			「ファイノメナ」(注)				
エウクレイデス (Eukleides BC3世紀ごろ)			ユークリッド幾何学				
アリストアルコス (Aristarchus BC310～BC230ごろ)			地動説、月と地球の大きさ				
アルキメデス (Archimedes BC287ごろ?～BC212)			アルキメデスの定理				
エラトステネス (Eratosthenes BC275ごろ～BC194ごろ)			地球の大きさ、「カタステリスモイ」				
ヒッパルコス (Hipparchus BC190ごろ～BC120ごろ)							
ヒュギーヌス (Hyginus BC64～AD17)						「天文詩」	
オウィディウス (Ovidius BC43～AD17ごろ)						「変身物語」	
ストラボン (Strabon BC64ごろ～AD24)						「地理誌」	
大プリニウス (Gaius Plinius AD23～AD79)						「博物誌」	
プトレマイオス (Ptolemaeus AD100ごろ～170ごろ)						「アルマゲスト」	
主な出来事	BC490 マラ톤の戦い		BC334 アレクサンドロス3世の東征開始			BC30 エジプトプトレマイオス朝が滅亡	
	BC438～432 パルテノン神殿の建造			BC31～ローマ帝国		AD79 ポンペイ滅亡	

注：アラトスはエウドクソスの数理的な「ファイノメナ」を詩的な「ファイノメナ」に書き換えた。

横浜の大佛次郎記念館で働く西宮千里（にしみやちさと）は、大佛の実兄・野尻抱影の研究を進めるうちに、野尻と同じ雑誌に寄稿していた作家・鈴木夕村と同じ名を持つ青年の存在に気づく。興味をもった千里は、職場の勉強会で野尻に関してさらに踏み込んだ調査を提案するが、そのためには乗り越えなければならない問題がいくつもあった。

連載小説

オリオンと猫

—野尻抱影と大佛次郎物語—

瀬名 秀明

題字・挿絵：吉原宏平

【第8回】

転がる紅茶の茶碗

猫のテリトリー、人のテリトリー

千里が資料箱を抱えて記念館の一階ロビーを歩いていると、左手の〈ティールーム霧笛〉とを結ぶ廊下から、来館者の女性が駆け込んできた。

「あの、あの、外で」

「はい？」

「猫たちが！」

箱をその場に置いて玄関に向かう。扉を開けて目に飛び込んできたのは、猫の「お父さん」と「モンちゃん」が階段の前で取っ組み合いの大喧嘩を繰り広げている場面だった。

「いきなり黒い方が怒り出したんで。白い方に飛びかかって」とその人はおろおろしながら説明するが、すでに二匹は転がり回るほどのバトルへと発展している。高岡先輩が駆けつけてきて二匹を引き離そうと試み、千里も手助けしようとしたが、慣れない人間には触れることさえ難しい。

やがて白いモンちゃんが霧笛橋の方へ逃げてゆき、あとには先輩に押さえつけられ黒いお父さんが残った。お父さんは怒りの鼻息を立て、全身を大きく震わせて先輩の手から

離れ、モンちゃんとは反対の方角へと去っていった。千里はしばらく呆然としていた。人間の方に引っ掻き傷がなかったのは奇跡的だ。

事務室に戻ったが千里は正直なところ、まだ動悸が収まらない。もうひとり、別の先輩が、〈霧笛〉のお客さまたちから詳しい事情を聞いて戻ってきた。どうやら最初に近づいていったのは年下のモンちゃんの方であつたらしい。もともとお父さんとモンちゃんは互いに牽制し合うところがあったのだが、ふだんはそれなりに近い距離感で、もう一匹のプリンちゃんとともに、揃って姿を見せることも多かったのだ。

「きっとモンちゃんが、お父さんと仲よくしたいと思って近づいたんでしょうね。でもお父さんの機嫌を損ねてしまったのかな」

三匹の猫はどこかの飼い猫ではないが、といって野良猫というわけでもない。港の見える丘公園で周囲の一般住民が皆で少しずつ世話をしてきた、いわば地域全体で飼われている猫たちだった。山手には外国人居住者も多く、英語を話すご婦人が自宅の庭で彼らをかわいがっている姿を見かけることもある。

数日経って、高岡先輩の不安が的中していたことがわかった。お父さんとプリンちゃんは昼下がりには記念館の中庭へ日向ぼっこの昼寝に来るのに、モンちゃんは姿を見せなくなったのだ。先輩が顔見知りの人たちに聞いたところ、モンちゃんはお父さんとの接触を怖れて丘の下をうろろろするのみ